

きつむられてあられる作歌態度その歌とは生ながらぬを惹きつける強さをもつてゐる。病弱な爲か教職にあられた爲か、妻としては淋しそうな性格、冷たさをもつてゐられる様に思へる。

日輪は今生れにけり山に凝る狹霧ほのぼの照りそめにげり

自然観照のおほらかさと牙にも見るべきものがあるが、作者はむしろ自身の心情の綴りにその歌の生涯を終つたと云つてよいでせうかなしみは背負ひ立ちつゝ慎ましく内に堪へなむわれはをみなご

よりどなきをみなのこところすべもなくなげきのはてはすきみゆくもむこんちゅう い ちひと胸ふかきとはのなげきをつを絶だしめてひやつかに心おちゆくことしのさむきみこころ

反省のあげくれの中に、時

故人へ對する説しさと哀れ  
かな思ひで読みまし。若くして終つた女の心情を詠  
ひなしに女性、眞率の告白  
史とも云へませう。

蒼穹社に入られて朝めぐ  
短歌に志し、著者ではあら  
れどが、三三年の間急速  
進歩を見せ、立派な自己を  
示してゐる。

女性にしてはおほいかば  
縁の太歌納は萬葉風に沿  
つゝある。

結婚生活にも、しらべ  
とした佗とを覺えつゝ常  
に人を戀はれてゐた。いつ

岡野直七郎氏に師事され  
ひたぶら歌・生きられた著  
者杉壽房校氏遺著歌集「光  
を仰ぐ」を子にし、遺族。  
方々のあたまかい心を感じ

刊夕日四

ばよし、萬々一一、お聞きなぞ、も馬鹿らしい。  
済みなければ私共一同御城角茲まで來しよ——」  
下で命を捨てる、生きて再び紫雲寺潟の土は踏むまい  
と女房子供に水盃をして參りました』

# 奉祝週間

# 味自まん 米屋の最中

# 耳鼻咽喉科

防火防空銃後のつとめ		資源愛護は火の用心		太陽無機コロイド塗料定價表	
番號	色別	容	防	火	塗料
一 號	白	斗罐入	三	二	○
二 號	濃鼠色	同	三〇、〇〇	三	一
三 號	黑	同	三五、〇〇	四	二
四 號	東	同	四五、〇〇	五	三
五 號	西	同	四五、〇〇	六	四
六 號	濃綠色	同	四五、〇〇	七	五
七 號	(陸軍色)	同	四五、〇〇	八	六
八 號	濃紅色	同	四五、〇〇	九	七
九 號	駆除	同	四五、〇〇	一〇	八
地 液	薄	同	四五、〇〇	一〇	九
上 液	藍	同	四五、〇〇	一〇	八
	色	同	四五、〇〇	一〇	七
		同	四五、〇〇	一〇	六
		同	四五、〇〇	一〇	五
		同	四五、〇〇	一〇	四
		同	四五、〇〇	一〇	三
		同	四五、〇〇	一〇	二
		同	四五、〇〇	一〇	一
		同	四五、〇〇	一〇	〇

# 流説を排撃して

## 國婦の指導精神徹底

### 平外四郡幹部招集指示懇談

昭和三十一年五月十五日

〔可憐夢想三第〕

時局下の国防婦人会問題に關し愛姫統合問題や婦人團体の活動について世上兎角の説が流されこれが爲中央と地方問はナ國婦内に惑はるものが多いで國本部では國婦の指導精神と新体制下に處する道を徹底せしむる目的の下に本部常任理事谷實夫少將を派遣十四日前十時から平市公會堂に一市四郡の國婦幹部百餘名集め講演と懇談會を開催した谷少將並に福島地方本部代理中村少佐臨席出席員は

平市組長以上三百名、三郡

下分會長以上八十餘名で定刻

平支部長青沼市長開會の挨拶

を述べ一同宮城遠拜、默禱、

次いで中村少佐幹部會招集に

ついて挨拶述べ、谷少將か

ら新体制と國防婦人會の態度

について一時間餘に亘り意

見を交換、谷少將は同二時十

五分飛車で新潟に向つて

將の講演を特別禮講した

等について一時間餘に亘り意

見を交換、谷少將は同二時十

五分飛車で新潟に向つて

將の講演を特別禮講した